

日本の「安心」はなぜ、消えたのか（3）

山岸俊男

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

日本人の正体は

「個人主義者」だった!?



あなたは「集団主義者」ですか？

さて、ここに簡単なアンケートがあります。わずか二問だけですが、よく考えてお答えください。

【第1問】 あなたの周りにいる人たち（日本人）は、アメリカ人や西欧の人に比べて、集団主義的な考えの持ち主が多いと思いますか？ それとも個人主義的な考えの人が多いと思いますか？

【第2問】 あなたは集団主義的な考え方をしていますか。それとも他の日本人よりも個人主義的な考え方をしていると思えますか？

少しだけ質問に補足をおけば、ここで言っている「集団主義」とは自分の利益よりも、自分の属している集団（会社や地域社会、あるいは国など）を優先させる態度や考え方を言います。

たとえば、会社のためなら自分の時間をある程度犠牲にしても働くべきと思うのは集団主義的な考えと言えます。これに対して、自分の時間をまず優先させた結果、会社の仕事が少々遅れることになったとしてもやむをえないと思うのは個人主義的な考えと言えるでしょう。

ここで改めて言うまでもないことですが、「日本文化論」の常識では、日本の社会は欧米に比べて集団主義的な傾向が強いとされています。日本の社会では「みんなで一緒」の集団行動が好まれるのに対して、欧米ではそれぞれの間が自分の意見を主張し、集団で活動するよりも個人で活動するほうを好むと言われます。

さてこうしたことを踏まえて、先ほどの二つの質問を一般的な日本人にしたところ、多くの日本人は「自分自身は集団主義的な考え方をしていないが、周りの人たちは集団主義的な考え方の持ち主である」と思っていることが分かりました。

これをもう少し砕けた感じで書き直すなら、こんな感じになるでしょうか。

「周りの人たちは世間に合わせて、仕事でも勉強でも文句も言わずに頑張っているけれど、それ

はちよつと我慢しすぎじゃないかなあ？ やはり自分の考えを持つことは大事だと思うし、言いたいことはきちんと言ったほうがいいと思う」

さて、あなたの回答はどうだったでしょう？ おそらくこの「典型例」に近い人が大多数だったのではないでしょうか。

日本人のパラドックス？

なぜ、このような回答が一般的になったのかの解説はあとでゆつくりするつもりですが、この研究結果から見ると、次のようなことが仮説として言えるのではないかと思います。

「日本人は自分たち日本人のことを集団主義的な傾向があると考えているが、ただし『自分だけは例外』と考えている集団である」

これは何とも不思議な話です。

もちろん、これはあくまでも平均的な日本人ということですから、「周りの連中は自分の意見を主張したがる個人主義者ばかりだが、私はあくまでも社会のため、日本のために最優先に考えて行動している集団主義者だ」と思う方もおられることでしょう。

しかし、全体として見ると、この研究結果から考えるかぎり、日本という国は自分のことを個人主義者だと思っている人の集まりであるということになります。

では、いったい「個人主義者だらけの日本」が、どうして自他ともに認める「集団主義的な社

会」になってしまおうのでしょうか？

有名な論理学のパラドックスに「『クレタ人は嘘つきである』とクレタ人が言った」というものがあります。

もし、すべてのクレタ人が嘘つきだとしたら、「クレタ人は嘘つきである」と発言したクレタ人も嘘つきになってしまつて、つじつまが合わなくなるという話ですが、日本人が「自分以外はすべて集団主義者である」と言っているのはクレタ人のパラドックスと、どこか似通っているようにも見えます。

勘違いの原因は「帰属の基本的エラー」にあり

この「パラドックス」を解くための一つの鍵は、社会心理学で「帰属の基本的エラー」と呼ばれている現象にあります。

ここで「帰属」というのは「原因帰属」の略で、要するに「なぜ人はそんなことをするのだろう」と人の行動の原因を考えることを言います。

社会の中で暮らしている私たちは、自分の周囲にいる人が何らかの行動をしたときに「どうしてそんなことをしたのだろう」とか「どうして、こんなことを私にしてくれるのだろう」と、知らず知らずのうちに相手の意図を推しはかるように心が動くものです。

しかし、そうした推測がつねに正しいとはかぎりません。

そこで起きるのが「帰属の基本的エラー」と呼ばれるものなのですが、人間は相手が何かをし
たときにその原因をついつい「相手の心」に求めてしまう傾向があることが社会心理学の研究で
分かっています。

人間の行動が、つねにその人の本心から行なわれているものとはかぎりません。周りの状況か
らやむなくそういう行動をしている場合もありますし、第三者から強制されて、しぶしぶやって
いる場合もあります。

そんなことは誰でも分かっているのですが、こと他人がやった行為については、そうした
「事情」があつてのことではないかと思わずに、その人がそういうことをする「心の持ち主」だ
と考えるしまうのです。

たとえば、たまたま買い物に入ったお店で、とても愛想よく懇切丁寧に接客してくれた店員
さんがいたとします。そういう経験をしたときに、きつと、あなたはその店員さんのことを「い
い人だ」「親切な人だ」と思ってしまうのではないのでしょうか。

客観的に、冷静に考えてみれば、店員さんがあなたに丁寧に対応してくれたのは、接客のプロ
として立派であつたということにすぎません。

その店員さんは、仕事だからあなたに対して愛想よくしていただけのことで、本当は内心「早
く決めてくれないかなあ」「面倒くさい客だなあ」と思っていたのかもしれないのです。しかし、
多くの人はその店員さんの態度を見て「この人は心優しい、いい人だから、私に親切なのだ」と

思ってしまったし、場合によっては「私（お客）に好意を持っているから、こんなに親切にしてくれるのだ」とまで思ったりしてしまうものなのです。

このように、相手の行動から「相手の意図」を推しはかる性質が人間にあるために起きる認知の違いを「帰属の基本的エラー」というわけです。

余談になりますが、バーやキャバクラといった、女性が男性の接客をするお店は、この「帰属の基本的エラー」を積極的に活用（悪用？）していると言えるのかもしれませんが。

バーなどで働く女性にすれば、男性客に対して丁寧接客するのはビジネスの一環でしかないし、男性の側もお金を払って店に通っている以上、そのことは頭では理解しているのです。

しかし、自分に対して優しい態度をお店の女性が示すと、「私のことを商売抜きで好意的に思ってくれているから、こういうことをしてくれるのだ」と考えてしまうというわけです。

傍（はた）で見ている人間にすれば、「なぜ、簡単に騙されてしまうのだろう」といぶかしく思ってしまうものですが、そうした思わせぶりな態度に引つかかってしまうのは、その人が世間知らずで騙されやすいというだけではなく、人間の心に備わっている「帰属の基本的エラー」の仕組みが働いていること、とも言えるのです。

「集団主義のパラドックス」はこうして生まれた

さて、そこで先ほどの話に戻ることにしましょう。

「帰属の基本的エラー」を前提にして考えれば、日本人の多くが「他人は集団主義的だけれども、自分は個人主義だ」と考えているという話がけっして間違いで、パラドックスでもないことが分かります。

すなわちあなたが「自分だけは個人主義的な心の持ち主だ」と思っているのと同様、他の人たちも「自分だけは個人主義的な心の持ち主だ」と思っているのです。

ただ、周りの人たちは——そして、実はあなたも——、人が見ているときには集団主義的に振る舞っているのです、その態度から推定した結果、あなたは「私とは違って、周りの人たちは集団主義的な心の持ち主だ」と思ってしまったというわけです。

こう考えてみれば、「みんなは集団主義的だが、私は違う」と思っている人が日本では多数派であるという話は、何の矛盾も来さないといいられます。

日常生活において、さまざまな事情から心ならずも集団主義的に行動してしまうという経験は、あなたもしょっちゅうしているのではないでしょう。

たとえばあなたが会社で残業したりするのも、心から「仕事をしなくてはいけない」と思っている場合ばかりではないでしょう。

上司から命じられたり、納期に間に合わずに叱られるのがイヤだったりするので、しぶしぶ仕事をしているということもあるはず。しかし、そうしたあなたの姿を見ている同僚たちは、

「あいつは会社人間だから」と噂うわさをしているかもしれませぬ。

逆に、残業をしている同僚や先輩のを見て、「真面目で、責任感のある人だ」とあなたは思ってしまうのですが、当人はやはりあなたと同じように早く帰りたくて、イヤイヤ仕事をしているだけかもしれないのです。

このように、自分自身の残業に関しては、責任感があるからでも、愛社精神があるからでもないことをしっかり自覚しているものなのに、それが他人の行動になると「他人も自分と同じ」とは考えないで、その人は本心から集団主義的に行動していると思ってしまうわけです。

かくして日本人は多数派ペンを選ぶ

前章で紹介した「ペン選択実験」で、「どちらのペンを選ぶとかまわない」と内心では思っている人が多いのに、なぜ多数派のペンを選んでしまうのかということも、この「帰属の基本的エラー」が分かれば、理解できてくるはずですよ。

日本人がペン選択実験で、多数派のペンを選ぶデフォルト戦略を採用するのは「他人はきつと、多数派のペンを選ぶ人に好感を抱くに違いない」と判断しているからに他ならないのですが、「他人はきつと好感を抱くに違いない」という判断には、実は確たる根拠がありません。

周囲の人の行動や態度から、「私と違って多くの人たちは控え目だ」と思っているし、「そういう思慮深い人のほうが好かれるのだから、多数派のペンを選ぶのが正解なのだろう」と推定しているだけのことです。

人間は、こうした判断が実は間違っているのではないかとなかなか疑ったりしません。他人の行動から相手の心を推しはかかってしまう「帰属の基本的エラー」が起きているからです。

「裸の王様」では「王様は裸だ！」と叫ぶ少年がいたので、王様も家臣たちも自分たちが詐欺師に騙されていたことに気づきました。

しかし、この「帰属の基本的エラー」の場合はそうはいきません。

頭では「これは商売だ」と分かっているにもかかわらず、クラブやバーに通って女性に入れあげつづける男性がいることも分かるように、人間は相手の態度で心を推しはかかってしまうという習性から脱することがなかなかできないようになってきているのです。

思い込みが産み出す現実

「個人主義でもいいじゃないか」とみんなが内心思っているにもかかわらず、現実にはいつまでも集団主義が維持されてしまう——その理由の一つは、今述べた「帰属の基本的エラー」にあるわけですが、実はもう一つ重要な原因も関係しています。

それはみんなが内心、「個人主義的に行動したら、周りの人たちに嫌われてしまうのではないか」と思いこんでいると、その思い込みが本当のことになってしまおうという現象です。

たとえば、集団の中に一人だけ個人主義的に行動する人がいたとします。

あなたも周りの人たちも実は内心では「その程度のわがままならば、目くじらを立てるほどの

ことでもない。許してやってもいいじゃないか」と思っているも、それを他の仲間がいる場所ではなかなか口に出して言うことはできないものです。というのも、そこで「あいつは困った奴だな」と他の人に調子を合わせておかないと、今度は自分自身が「他の人の意見に同意しない困った奴」と思われてしまう危険性があると考えてしまうからです。

こういった話はたとえば、町内会の井戸端会議などでもしょっちゅう起きていることです。

たとえば、ご近所のAさんについての悪口を言う人がいた場合、本当はそんなことはないと思っただけでも、大声で悪口を言う人の話には口を合わせておかないと今度は自分が標的になってしまいかもしれないと心配になってきます。そこでついつい心にもないのに「そうだよねえ、Aさんは困った人だわ」と言ってしまうというわけです。しかし、そうやってあなたが悪口を言うことで、他の人たちもAさんを批判することになってしまいます。

このように「他の人たちは個人主義者に批判的だろう」と思いこんでしまうことで、実際には誰もそうは思っていないなくても、個人主義者が批判されてしまう現実が生まれてしまうというわけです。そして、いったんこうした「現実」が作られてしまうと、みんなが心ならずもそれに合わせて行動しなくてはならなくなってしまいます。

集団主義と個人主義の話にかぎらず、このような実体のない思い込みが本当の現実を作り出してしまおうというケースは、世の中にたくさんあります。

たとえば、「あの銀行はつぶれそうだ」という噂がいったん立つと、それを信じて貯金を引き

出そうとして銀行の窓口に並ぶ人が現われたとします。そうすると、つぶれるという噂が根拠のない話だと考えていた人たちも「こうして人々が貯金を下ろし始めれば、銀行の経営が危なくなるかもしれない」と貯金を下ろす列に並びはじめることになるので、本当に銀行の経営が危機に陥ってしまうというわけです。

こういった現象は社会心理学では、「予言の自己実現」と呼ばれているのですが、集団主義の社会で個人主義者が排除されるのも、人々が「個人主義者は嫌われるだろう」と「予言」するところがそもそもの原因になっているというわけです。

日本人の「個人主義度」を調査する

さて、こうして考えていくと、日本社会が集団主義的な社会であるからといって、それがそのまま日本人それぞれの心にも集団主義的な性格があるとはかぎらないことがお分かりいただけるでしょう。

私たち日本人も、そして欧米人も、日本人は集団主義的な心を持った人々だと思っていて、それが「日本人らしさ」だと思っています。

しかし、それは私たちが集団主義的に振る舞っているだけのことであって、それぞれの日本人の心は、実は少しも集団主義が好きではない、自分の利益や権利を主張する個人主義であるのかもしれないのです。しかし、そのことは「帰属の基本的エラー」ゆえに日本人自身も気づいてい

ないし、ましてや外国人にはなかなか分かりません。

かくして、日本人は集団主義的な心の持ち主であるという「神話」が広がったのではないかと私は実はそう考えているのです。

しかし、意識調査の結果から「本当のところは日本人は個人主義ではないだろうか」といっても、これは単なる仮説にすぎません。そこで実際に、日本人はどのくらい個人主義的な心を持っているのか、それをまず調べる必要があります。

一般的に日本人は、みんなと一緒に行動するのが好きで、自分のことよりも周囲の人たちの利益を大切にする傾向があると思われていますが、はたしてそれが事実なのか——それを確かめるために、私は日本とアメリカで次のような実験を行なってみました。

この実験は三人一組で行なわれるものなのですが、参加者たちは一人ずつ、個別の実験ブースの中に入って、コンピュータを使った簡単な作業を行ないます。この作業の「手間賃」が彼らのアルバイト料になるという仕組みになっています。この実験に参加したのは、日米の大学生たちです。

その作業というのは簡単なテストのようなもので、クリアした問題の数に応じた得点がそれぞれに与えられます。そして、作業終了後に三人の獲得した得点を合計し、その合計得点に見合った報酬がグループ全体に与えられます。実験の参加者たちには、その報酬を三等分したものが支払われます。

つまり、この作業はそれぞれが個別に行なってはいるのですが、報酬の面では共同作業の形を取っているということになります。

このような作業では、「ただ乗り」をする人が出てくる可能性がつねにつきまといまいます。たとえばまったく働かなかつたとしても、他の人が働いてくれれば、その人は労力ゼロで報酬を受け取ることができからです。

そこまで悪質でなくても、個々人の間で作業効率の違いは違ってくるはずなのに報酬額はつねに三分なのですから、一番真面目に働いて結果を出した人は「働き損」ということになってしまいます。

「自分は真面目にやっけていて、実績も出している」という自覚のある人にとっては、こうした共同作業のあり方に不満を感じる場合もあるでしょう。しかし、その人が集団主義的な心の持ち主であれば、「みんなのためだから」と我慢をするだろうと予測できます。

さて、日本人はこうした環境に置かれたときに、どのような態度を取るのでしょうか、そしてそれはアメリカ人とどう違うのでしょうか——これが、この実験のテーマです。

この実験では一セットの作業を二〇回繰り返し、一回の作業ごとに報酬を確定させていくという形式を取りますが、そこで作業の前に「グループを離れて一人で仕事をする」というオプションを選択できるように設定しました。

もし、「みんなと一緒に頑張る」という集団主義的なやり方が気に入らない人は、グループか

ら離脱して、一匹狼になってもいいというわけです。

とはいっても、実社会でも組織の一員として働く道を選ばず、フリーランスとして働けば、余計なことまで神経を遣わなくて済む代わりに、リスクや苦勞を引き受けなければいけないことも多々あります。

そこでこの実験では二つの条件を用意することにしました。

一つは、たとえ一匹狼の道を選択したとしても、集団で働いているときと同じ基準で報酬を得られるという低コスト条件、もう一つは同じ作業量に対して、集団作業のときの半分しかもらえないという高コスト条件です。

本当は「一匹狼」の日本人

さて、こうした条件の下、行なわれた実験で日本人はどのように行動したのでしょうか。

まず、一匹狼になっても、集団作業と同じ基準の報酬がもらえる「低コスト条件」のときの結果から紹介していきます。

この場合、日本人もアメリカ人も同じような行動を取りました。二〇回の作業のうち、平均八回の作業で実験の参加者たちは日本人でもアメリカ人でも一匹狼の道を選択しています。

一人あたり「二〇回に八回」という数値を、グループ全体に置き換えると三倍の二四回。つまり、二〇回の作業で毎回、少なくとも一人がかならず一匹狼になっている計算になるわけで、「自

分は他の人よりも効率がいい」と思った人が躊躇なくグループを離れたのだろうと推測できません。低コスト条件では、集団作業を離れるリスクはゼロなのですから、これは合理的な行動だとも言えます。

では、次に高コスト条件ではどうなったでしょうか。

すでに述べたように、高コスト条件では作業グループから離脱することによって、他人の「ただ乗り」は防ぐことができますが、その代わり報酬の基準は半分になります。この条件下で、一匹狼になることでトクをするには、その人がグループ平均の倍以上の成績を上げている必要があります。人の倍以上働くというのは、相当ハードルの高いことで、実際、私の実験でもグループ平均の倍以上の成績を上げた参加者は一人もいませんでした。

つまり、自分の得られる報酬額を考えれば、高コスト条件でグループから離脱することは合理的な選択とは言えません。それでもグループから離脱する選択をするのは、怠け者と一緒にされるのが我慢できない、他人に利用されるのがイヤでしょうがないからだろうと推察されます。

さて、そこで実験の結果を見ると、高コスト条件でグループから離れるかどうかの頻度において、日米間に明らかな違いが見られました。

アメリカ人参加者の場合、グループを離脱した回数は二〇回のうち平均一回程度しかありません。これに対して、日本人の場合、ほぼ八回も離脱していて、低コスト条件のときとあまり変わりません。つまり、日本人のほうがアメリカ人よりもずっと個人主義的に行動しているというわ

けなのです。

しかし、それにしても報酬が確実に下がると分かっているとしても、他の人たちとの共同作業を捨てて一匹狼になろうとする日本人の「個人主義者ぶり」には、読者のみなさんもきつと驚かれるのではないのでしょうか。

一般的な文化論では、ビジネスでも学問研究でも個人レベルで力を発揮するのがアメリカ人の特性で、これに対して「日本人は個人プレイは弱い、集団で働くと強い」と言われてきたものです。

ところが、この実験ではたとえデメリットがあろうとも日本人の参加者のほうがグループを離脱しています。この実験結果を見るかぎりでは、アメリカ人よりも日本人のほうがずっと「他人に足を引っ張られるのがイヤでしょうがない」と考える傾向が強いということであり、逆にアメリカ人のほうは、多少、他人に足を引っ張られようとも共同作業を選ぶという傾向があることが分かります。

他人を信頼するアメリカ人、信頼しない日本人

さて、こうして見ていくとやはり日本人一人一人の心の特性は集団主義どころか、むしろアメリカ人よりも個人主義的な色彩が強いのではないかという印象を持ちます。

これまで読者のみなさんの多くもきつと、「日本人は和の民族である」といった話を何の疑い

もなく信じてきたことでしよう。

たとえば、よく言われることに、「アメリカ人は小さな文字でびつしりと書かれた契約書を取り交わさないと安心しないが、日本人はいったん相手を信用すれば、たとえ口約束であろうときちんと約束を守る」という話があります。

日本人は協調の精神を持つているから、相手を信用して裏切らない。これに対して、競争社会の文化の中で暮らし、個人主義の精神が徹底しているアメリカ人は相手を簡単に信用したりしない。そればかりか、隙があれば相手を裏切り、蹴落とすこともいとわれないという印象を持たれています。

しかし、今紹介した実験結果では、たとえば自分が損をすることになろうとも、日本人は一匹狼の道を選びたがり、ある程度の損は承知でもアメリカ人は他者と協力していこうとしています。

つまり、私たちの「常識」とは正反対の結果が出ていますが、この「謎」を解くカギを提示してくれるのが、日本の統計数理研究所が行なっている調査です。

この調査は日本人二〇〇〇人とアメリカ人一六〇〇人を対象に質問紙調査を行なったものなのですが、その結果を見ると日本人よりもアメリカ人のほうが他者一般への信頼感が強いことを示しているのです。

この調査ではさまざまな質問がなされているのですが、他者一般への信頼感に関する質問は三つあります。

その一つは「たいていの人は信頼できると思いますか、それとも用心するに越したことはないと思いますか？」という質問なのですが、この答えを日米で比較してみると、アメリカ人の四七%、つまりほぼ半数が「たいていの人は信頼できる」と答えたのに対して、日本人では同じ答えをした人は二六%、つまり四人に一人しかいないという結果になっています。

こうした傾向は他の関連する二つの質問でも変わりません。

第二の質問「他人は、隙があればあなたを利用しようとしていると思いますか、それともそんなことはないと思いますか」に対して、「そんなことはない」と答えている回答者がアメリカ人では六二%もいるのに対して、日本人は五三%で、やはりアメリカ人のほうが他者への信頼感が強いことが分かります。

さらに「たいていの人は他人の役に立とうとしていると思いますか、それとも、自分のことだけに気を配っていると思いますか」という質問に対して、アメリカ人で「他人の役に立とうとしている」と答えた人は四七%いたのに対して、日本人回答者では一九%にすぎないという結果が出て、日米差がますます開いています。

「人を見たら泥棒と思え」

こうして見ていくと、日本人がアメリカ人よりも個人主義的であるのは、日本人がアメリカ人よりも他者一般に対しての信頼感が低いことと関係があるのではないかと思わされます。

先ほどの実験に参加した多くの日本人が、アメリカ人よりも集団主義的な行動を取らなかったのは、「他の人は自分を利用しようとするのではないか」とか「他の人は自分のことしか考えていないのではないか」といった疑心暗鬼ぎしんあんきに駆られることが大きく関係しているのでしょう。

実験に参加している人にとつて、他のプレイヤーは赤の他人であり、それが男性なのか、女性なのかも分からないし、直接コミュニケーションできるわけでもありません。そうした状況に置かれたとき、日本人はとりあえず「他の人たちは私を裏切ったり、利用しようとするのではないか」と考えてしまう傾向にあります。つまり、ことわざで言う「人を見たら泥棒と思え」という状態になってしまうので、素性の分からない他人と協力しあうことはなるべく避けたほうがいいと判断するわけです。

これに対して、アメリカ人は他者一般に対して日本人よりもずっと信頼感を持っていると言えます。

相手が誰か分からない状況にあつても、アメリカ人のほうは「たいいていの人は信頼できる」と考える傾向にあり、他の人が自分を利用するのではないかとはい日本人ほどには疑われない。そこで、私が行なった実験のような状況でも、とりあえず協力的行動を取ったほうが自分もトクをするのではないかと考えるし、損をしてでも一匹狼になろうとは考えない——つまり、「人を見たら泥棒と思え」という日本人に対して、アメリカ人は「渡る世間に鬼はなし」ということわざに近い行動をしていると言えるでしょう。

なぜ、他人に対する評価が一八〇度違うのか

日本人は「人を見たら泥棒と思え」と考え、アメリカ人は「渡る世間に鬼はなし」と考える——この事実はいつたい何を意味するのでしょうか。

そこでまず確認しておきたいのは、日本人が他人を容易に信じない傾向があるからといって、それは日本人の「心の性質」がアメリカ人の心よりも狭量であるとか、あるいは劣っているという事ではないということです。

しかしながら現実を見ると、多数派ペン実験や自己高揚傾向実験に見るように、日本人とアメリカ人では心の働き方が違うように見えます。

だが、それは日本人の心がアメリカ人と違うのではなく、日本人の場合、たとえばほかの人と一緒に行動したり、自己卑下してみせることのほうが、日本の社会でトクをするからに他なりません。つまり、そう行動することが日本社会という環境に適應する戦略であつたというわけです。

さて、こうした観点に立つたとき、日本人とアメリカ人の他者に対する信頼感の違いも、実は日米社会の違いが産み出したものではないかという仮説が浮かびあがってきます。

では、いつたい日本とアメリカの社会の違いのどこが、「人を見たら泥棒と思え」の日本人と、「渡る世間に鬼はない」のアメリカ人を作り出したのでしょうか。それを次章で検討していくことにしましょう。

日本の「安心」はなぜ、消えたのか 山岸俊男著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,680 円（税込）

ISBN 978-4-7976-7172-8

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)